

Close-up Interview (10月号 表紙の顔)

## 水野 耕佑

KOSUKE MIZUNO

「思いがけず巡ってきた  
チャンスをモノにできたことで、  
ものすごく自信になりました」

「チャンスの神の前髪をつかめ」という諺?がある。ギリシャ神話に登場する“チャンスの神”カイロスには前髪がなく、後ろからではつかむことができない。だから「好機は瞬時に捕らえろ」という意味だ。前年までの大会規程が改定されたことによって思いがけず出場機会を得た今年の男子新人戦を制し、晴れてタイトルホルダーの仲間入りを果たした水野耕佑プロは、まさに「チャンスの神の前髪をつかんだ男」といえるだろう。  
(PHOTO: 福地和男)

## 小学生時代からプロ志向

父親は水野成祐プロ(24期/優勝1回)。当然ながら、ボウリングは幼少期からごく身近にある遊戯だった。

「幼稚園児のころから、親父と一緒にボウリング場に行き、投げさせてもらっていたし、自宅では、親父がガチャポンのカプセルにプラグ液を流し込んで作ったボールを、庭で転がしたりしていました(笑)」

小学校3年生のときに初めて8ポンドのマイボールを持ち、6年時にはJBCに入会して競技大会にも出場できるようになるが、そのころからすでにプロ志向だったそうだ。

「いつも親父が投げるトーナメントに付いて行ってたので、自然と『プロボウラーになりたい』と思っていました。ほかの職業に就きたいと考えたことはなかったですね」

ちなみに双子の弟・優亮さんもアマチュアボウラー

で、高校時代の3年間、全国高校対抗選手権にチームを組んで出場し、2年時に4位入賞を果たしている。

高校卒業後は1年間、ラウンドワン八千代村上店でアルバイトをしながら練習に励んだ。

「2016年6月にこのボウリング場(アイキョーボウル)がオープンしたとき、声をかけてもらって社員スタッフとして入りました」

プロを目指す環境が整い、満を持して初挑戦した翌17年の

プロテストに見事合格。最終成績は合格者18名中の9位だったが、内心は冷や汗ものだったという。

「西日本会場での2次テスト(初日・2日目)が終わったあとに股関節を痛めてしまって、思うように投げられなくなりました。東日本会場のラスト2日間は、ほかの受験生がハイスコアで打ちまくっているときに全然打てなくて、ヤバかったですね。投げている間もずっと痛く

しょうね。周りの人にも『似てるよね』って言われます(笑)。普段、親父のほうから何か言ってくることはないですが、疑問に思ったことは自分から投げかけるようにしています。でも、基本的には自分で考えてやるのが大事だと思っているし、それがボウリングの面白味でもあると思います」

## 勝ちに行きつて勝った新人戦

デビュー後の2年間は目立った成績を残してい

ないが、3年目の男子新人戦で準優勝し、翌20年はレギュラーツアーのドリストタメズカップで3位入賞を果たした。会場はいずれも群馬県のドリームスタジアム太田。今年も同所で開催された男子新人戦で念願の初優勝を飾ったことは、前号で詳報したとおりだ。

「相性のいいセンターだし、行く前から優勝を強く意識していた」という水野は、予選3位→準決勝2位→決勝ラウンド

ロビン1位で決勝ステップラダーにトップシード進出。だが、優勝決定戦はプロテストのときと同様にスナリとはいかなかった。

「目標の優勝が目前にきているなかで、最初は緊張もあって気持ちがフワフワしていた」そうで、対戦相手・伊吹太陽(59期)のストライクラッシュに遭い、中盤までに大差をつけられてしまう。自らは3つのスプリットオープンで、結果は168:278の完敗。再優勝

決定戦も、このまま相手の勢いに押し切られてしまうのでは?と思われたが、本人の考えは真逆だった。

「優勝決定戦の途中から、次のゲームをどう戦っていくか…と気持ちを切り替えて、リリースのタイミングなどを調整しながら投げていました。自分もそうですが、あれだけストライクが出てると、一度ピンが残ったときに対処を迷うもの。再優勝決定戦は、そういうスキに付け込めればと思っていた」

果たして再優勝決定戦は思惑通りの展開となり、221:190で伊吹に雪辱。水野は晴れてタイトルホルダーの仲間入りを果たした。

「今回、思いがけず巡ってきたチャンスをモノにできたことで、ものすごく自信になりました。最近は精神的にも安定してきたし、試合経験を積み重ねるうちに、ボールの選択やラインどりに関してもレーンの変化に対応できる力が少しずつ付いてきたという実感がありません」

## 初のシード入りも視界に

「1勝ただけでこんなにも違うのかと思うくらい、自分を見る周囲の目が変わりました」と笑う。今後の目標を問うと、即座に「レギュラーツアーでの優勝」と返ってきた。

「センターの相性の良し悪しに関わらず、どこの会場でも常に上位に行けるように意識して、タイトル数を積み上げていきたいです。あとは、できればもう少し体重を増やしたいですね(苦笑)」

コロナ禍で2シーズンが連結された今季は、現在ポイントランキング14位で初のシード入りも視界に入ってきた。年内の公式戦は残り4戦。ちなみに、今号の発行時にはすでに終了しているが、第43回ジャパンオープンダブルス戦には前述の弟・優亮さんとのコンビで



▲意外にレアな?父子のツーショット。父は「プロになりたてのころと較べたら、はるかに成長している」と目を細めた

出場するそうだ。

目下のところ、その勇亮さんにプロ入りの意思はないそうだが、3歳下の妹・あやかさんは今年度のプロテストに挑戦。2次まで進んだが、合格基準点に36ピン及ばず涙を吞んだ。現在は同じアイキョーボウルでアルバイトをしながら、次回のプロテストに捲土重来を期している。近い将来、親子3人が同じ公式戦のアプローチで競演する可能性も大いにありそうだ。

取材協力: アイキョーボウル

水野プロと一緒に投げよう!  
近日開催のチャレンジマッチ

●10月23日  
埼玉・ニューパールレーン武里

●11月23日  
三重・伊賀にんにんボウル

みずのこうすけ/1996年8月14日生まれ、千葉県出身。175cm、56kg、右投げ。血液型A。2017年プロ入り(56期/ライセンスNo.1384)。優勝1回。20/21年度ポイントランキング14位、アベレージ207.54(男子新人戦終了現在)。アイキョーボウル所属。



▲(左)私服でのロケ撮影時、カメラマンのポーズ指示には照れまくりだったが、こうした撮影にもどんどん慣れていくだろう(右)投球フォームは父・成祐プロに酷似。その父曰く「子供のころからタイミングもよかったですし、プロ向きのリリースをしていた」そうだ